〈近代本論第十二回：キーワードと年表〉

１．年表

１７１２　ジャン＝ジャック・ルソー誕生（～１７７８）
１７２４　イマヌエル・カント誕生（～１８０４）
１７５４　マクシミリアン・ロベスピエール誕生（～１７９４）
１７５５　ルソー『人間不平等起源論』
１７５９　ジョルジュ・ダントン誕生（～１７９４）
１７６２　ルソー『社会契約論』
１７６５～７０　ルソー『告白』（死後刊行）
１７６９　ナポレオン・ボナパルト誕生（～１８２１）
１７７０　ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル誕生（～１８３１）父は南独シュトゥットガルトの中級官吏
１７７３　ゲーテ『鉄腕ゲッツ』（疾風怒濤期の代表作）
１７８１　シラー『群盗』（同上）
１７７５～１７８３　アメリカ独立戦争
１７７６（7月４日）　アメリカ独立宣言
１７８１　カント『純粋理性批判』
１７８８　カント『実践理性批判』
１７８９　ヘーゲル、チュービンゲン大学に進学、プロテスタント神学、哲学を学ぶ。同窓にフリードリヒ・ヘルダーリン（１７７０～１８４３）、フリードリヒ・シェリング（１７７５～１８５４）がいた。三人はフランス革命に心酔し、〈自由の樹〉の植樹祭に参加する。
１７８９　フランス三部会招集、フランス革命開始
１７９１　フランス第一憲法公布（立憲君主制憲法）
１７９２　フランス王政廃止　第一共和政開始
１７９３　フランス第二憲法（ジャコバン憲法）
１７９３～９４　ジャコバン党独裁、恐怖政治（ロベスピエール）
１７９４（6月８日）〈最高存在の祭典〉（ロベスピエール主宰の理性崇拝祭典）
１７９４（7月２７日）テルミドールのクーデタ、恐怖政治の終わり
１７９５　フランス第三憲法（共和国憲法）発布（制限選挙）総裁政府樹立
１７９８　マルサス『人口論』
１８０４　ナポレオン、皇帝位に（～１８１５）

１８０５　アウステルリッツの戦い（三帝会戦)、ナポレオンの覇権確立
１８０７　ヘーゲル『精神現象学』
１８０９　チャールズ・ダーウィン誕生（～１８８２）
１８１２　ロシア戦役の失敗
１８１４～１５　ウィーン会議
１８１４　ルイ十八世〈憲章〉公布、フランス王政復古
１８１５　ワーテルローの戦い　ナポレオンの〈百日天下〉終わる
１８１６　ヘーゲル『大論理学』
１８１８　ヘーゲル、ベルリン大学へ招聘される、美学、歴史哲学、哲学史、宗教哲学、法哲学の講座を担当
１８２１　ヘーゲル『法哲学』
１８５３　黒船来航
１８５８　日米修好通商条約締結

２．世界史と人類史

→　人類史は二つの画期によって三期に区切られる
→　第一革命（農耕牧畜革命＝新石器革命）
　　第二革命（機械情報革命）
→　両者ともに道具系の自己組織的大変容を本質とする
→　その基底には〈道具を使用する（使用せざるをえない）種〉としての人類の種的本質がある
→　①　種の誕生（**homo sapiens sapiens**）から新石器革命まで（アフリカ出発＝グレート・ジャーニーによる画期）
　　②　新石器革命による古代王権、中世封建の進展（農本的基底）
　　③　機械情報革命による最終段階の人類史の展開（現在地）
→　〈世界史〉のパラダイムは第一革命によっては生まれず、第二革命のある時期に登場する（フランス革命とヘーゲルの本質連関）
→　最大の体系家としてのアリストテレスとヘーゲル
→　アリストテレスに欠如していたのは歴史哲学と経済学だった（マルクス）
→　ヘーゲルは〈世界史において自己実現する世界精神〉の哲学大系を構築した
→　アリストテレスやブッダは、第一革命のただ中にではなく、その帰結としての古代世界の中に生きている
→　彼らの時空意識は、〈系譜性〉によって規定されていた（アリストテレスのギリシア哲学史概観、ブッダにおける〈過去七仏〉）
→　それは定位の内実の系譜であり、〈世界史〉へ拡大することはない
→　マクロの時空意識はまだ神話的系譜性に規定されていた（習合による拡大の力学が内在していた）
→　ヘーゲルはフランス革命によって「現実に」世界史を体験した

→　第二革命のただ中において、〈世界史〉パラダイムがその上部構造イデオローグとして生成したことの意味
→　それはしかしすでに、種史（人類史）、生命史、宇宙史のマクロ時空によって乗り越えられ、過去のものとなっている（われわれの時空はいまここで生成している）

３．〈世界史〉と〈座標〉
→　〈デカルト座標〉は近代通有の普遍座標となった
→　ヘーゲルの〈世界史〉は近代固有の「普遍的」イデオロギーとなった
→　近代的合理精神の時空はデカルトの解析幾何（デカルト座標）から始まり、それはいまだにわれわれの合理的世界把握（生命把握のメカニズム面、宇宙把握の方程式組織）となっている
→　そこにおいては、時軸そのものが線形的に逆転可能となる（時軸の消滅）
→　したがってそこには〈歴史〉は不在である（厳密には宇宙史も）
→　ではヘーゲル的〈世界史〉は、近代的合理主義と無縁のものなのか
→　そうではない、〈歴史〉は、〈集団の履歴〉＝社会的記憶を真の内実とする
→　その集団的記憶の覚醒は、個我の共同体からの分離と同時に始まっている（ルネサンスにおける〈古典〉意識の覚醒＝集団的アイデンティティの再構築）
→　ヴィーコ、ヘルダーを経て、〈民族の記憶＝歴史〉理論へと進展していった
→　それはつまり、〈民族共同体〉としての〈国民国家〉のアイデンティティを形成する運動でもあった
→　フランス革命において、その共同体は〈革命共同体〉のパラダイムへと統合される
→　この統合が、ヘーゲルの〈世界史〉の出発点となった

４．〈世界史〉と〈弁証法〉と〈国家〉
→　〈ドイツ観念論（理想主義）〉の頂点としてのヘーゲル哲学
→　〈存在〉（**Sein**）と〈生成〉（**Werden**）の力強い二極化
→　ドイツ的自同的展開力としての、**Bildung**（形成、教養）の全展開
（ヘーゲルの時代はゲーテの〈形成小説〉の時代でもあった）
→　ヘーゲルの〈世界史〉の「論理」は〈精神の弁証法〉である
→　記述論としての〈精神現象学〉、原理論としての〈大論理学〉
→　デカルトとの対比（記述主体としての純粋自我→フッサールの記述現象学へ、原理論としての〈方法叙説〉）
→　ヘーゲルの弁証法は、近代哲学の真の記念碑
→　近代的概念思考において、ヘーゲルとカントは二つの頂点を意味する
→　〈実体的体系〉（積極的体系）　⇔　〈批判的体系〉（対自的、二次的体系）
→　個我の哲学（理性の自己批判）　⇔　集団の哲学（＝世界精神の哲学）
→　すべてはしかし、国家と理性の等置によっておそろしいほどの転落を示した

→　人種論、植民地主義、奴隷制是認への退行
→　近代哲学の頂点における、人文性の自壊、転落
→　その媒体となったのは、〈国家〉と理性の等置であったという基本事実を忘れないようにしたい

５．開港開国の背景にあった〈文明化〉イデオロギー
→　〈革命〉が触媒となった強権国家の進展　＝　列強の成立
→　世界市場の拡充　→　〈世界史〉パラダイムの成立（ヘーゲル）
→　弱肉強食の自己肯定（勝ち組としての列強）
→　生物主義による補強
　　＝　進化論（ダーウィン、ウォレス）　→　社会進化論へ

６．ヘーゲルの〈世界史〉パラダイム
→　ヨーロッパの世界支配の自己肯定
→　奴隷制肯定、植民地主義、人種論を内包（後述）
→　前提はフランス革命によって開始された国家の再編
→　反動としての警察国家型強権国家の形成
→　ヘーゲルはそのイデオローグとなった（ベルリン大招聘以降）

７．青年ヘーゲルの定位遍歴
→　南独の小領邦に生まれる（父は中級官吏、プロテスタントの家庭）
→　神聖ローマ帝国の化石化した形骸体制
→　父はプロイセン王家を信奉し、息子に王家の名を二つ与えた（ヴィルヘルム・フリードリヒ）
→　神学と哲学を大学で学ぶ（聖職者のキャリアが定型）
→　上流家庭の家庭教師をしながら苦学し、大学就職の道をさぐる（これも定型）
→　大学ではフランス革命に心酔し、〈自由の樹〉の植樹祭に、同窓のヘルダーリン、シェリングと共に参加した
→　ドイツは〈疾風怒濤期〉の時期で、ゲーテやシラーも〈怒れる若者〉の象徴となっていた
→　この時期のヘーゲルの国家観はドイツの封建的遺制を批判しつつ、無政府主義的主張に傾くこともあった（後述）
→　ナポレオンによるドイツの〈解放〉に期待（〈白馬にまたがった世界精神〉云々）
→　ナポレオン敗北後はプロイセンの集権体制によるドイツ統一に次第に期待するようになる（これも当時の若者としては珍しくなかった）
→　〈世界精神の自己実現としての世界史〉パラダイムへ収斂

８．〈世界史〉パラダイムの変遷
→　〈世界史〉パラダイムは近代国家の再編と不可分の関係にあった

→　それはフランス革命によって始まった強権論の分岐に照応していた
→　左派は〈革命の時代〉を経て、〈国家の死〉を主張する
→　その主張は〈一党独裁〉（レーニン）とアナキズム（バクーニン、クロポトキン）に分岐した
→　右派は反革命の警察国家型強権国家を支持した
→　プロイセンがそのモデルを造り、ヘーゲルが〈哲学〉を与える
→　フランシス・フクヤマは『歴史の終わり』（１９９２年）によって、ヘーゲル的世界史パラダイムの終焉を宣言したが、それ自体、ネオコンという一つの保守勢力のイデオロギーとなった
→　〈ネオコン〉の前提は〈文明の衝突〉（ハンチントン、１９９６年）であり、これは〈文明化〉イデオロギーの後裔であるから、結局サイクルはひとめぐりして、再び〈世界史〉が登場する仕組みになっている
→　〈ネオコン〉の影響力は短命におわった
→　パラダイムなき大国覇権の時代
→　〈権威主義〉という文飾に包まれた全体主義の台頭
→　新たな列強の候補者たちが横並びに連なる時代が現代である

９．啓蒙期は〈世界市民〉の理念を生んだ
→　個我の近代的定位の完成に照応
→　理性的自律の共同性　→　市民の世界市民への普遍化（カント）

１０．フランス革命以降、共同性の基体は国家へと移行する
→　革命派も反革命派も強権国家と対峙することになる
→　その過程で〈市民〉理念は形骸化していった
→　同時に法治の軽視、形骸化も不吉な形で進行していく
→　この傾向はすでにヘーゲルの国家論で出そろっている（『法哲学』）
→　ヘーゲルにとっても〈歴史〉の主役は国家であり、もはや市民ではなかった

１１．〈世界市民〉理念の終焉　→　陰謀論の台頭
→　フランス革命は〈市民〉理念を形骸化し、革命派と反革命派の二項対立に還元した
→　その際、この二項対立から、陰謀論が派生した
→　最初の陰謀論は〈イルミナーティ〉をめぐるものである

１２．〈世界市民〉理念からの秘密結社の発生
→　先駆型としてのフリーメイソン
→　フリーメイソンの起源ははっきりしないが、１７世紀にはスコットランド、イングランドで組織が成立していた

→　１８世紀に組織化が進んだのは、啓蒙期の精神（友愛精神）と同化したためだと思われる
→　その際、中核組織は近代派と古代派に分裂した
→　この古代志向（観念の古代志向）はルネサンス的古代復興と、近代志向は啓蒙的科学精神と重なる部分がある
→　全体としてルネサンス期の秘教共同体とカバラ、啓蒙精神の融合を認めることができる
→　１８世紀の知識人層の間に急速に広まった（ゲーテ、モーツァルト、ベートーベンの例）
→　アメリカ独立戦争への影響　→　一ドル紙幣のエンブレム
→　フランス革命への影響

１３．〈イルミナーティ〉弾圧による陰謀論の開始
→　イルミナーティは〈世界市民〉系統の、穏やかな啓蒙団体
→　ドイツの大学教授が知的エリートの啓発的互助会として始めた（１７７６年）
→　人間の自由、平等を理性共同体としての〈世界市民的共和制〉で実現するためのアイデアを練る
→　ゲーテやヘルダーも関係した
→　南独の反動的（反プロテスタント的）政教政策にイエズス会が関わっていたため、それを告発し、さらにイエズス会を模した秘密組織を作ろうと提案した（クニッゲ男爵のパンフレット、１７８９年、引用１）
→　ゲーテ（『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』）やモーツァルト（〈魔笛〉）のフリーメイソン的啓蒙の礼賛とは異なったアクチュアリティが顕在化している
→　政治的啓蒙に特化していたことが、知的生活の全般を啓蒙しようとしたフリーメイソンと異なる
→　そのため官憲の警戒心を刺激することにもなった
→　バイエルンでの弾圧により地下活動を強いられる（１７８５年）
→　フランス革命陰謀論（革命はイルミナーティが仕掛けたという妄説）を生む
→　**Q**アノンと同じ次元の妄説

引用１

〈もし一つの最良の人々を集めた結社が、したがう人々を注意深く指導して、公徳へと錬磨していくとする。イエズス会がその秘密の結社活動で悪意ある目的を追求するのに対し、われわれの結社は、人々をその青春のはじめから同胞への愛をはぐくみ、高潔なる、偉大なる原理原則を広めていくとする。つまり一言で言って、世界の公益のために働こうとする、もしそうするならば、達成できないことなど、はたして存在するだろうか。〉
（クニッゲ男爵〈イエズス会、フリーメイソン、および薔薇十字会について〉１７８０）

１４．近現代の隠れた政治風土としての陰謀論、秘密結社

→　地下組織、秘密結社は、急進化しつつ十九世紀の隠れた政治風土と化していった

→　二月革命前夜のブルクハルトの感慨（当時地方紙の編集主幹）

→　〈ありとあらゆる秘密結社を見た、そこには思い出すのも厭になるような人間たちが徒党を組んで、社会の変革を議論していた〉（書簡）

→　陰謀論の妄想も定向的に増大し、〈七人の長老たちの世界陰謀〉　＝　反・ユダヤ主義の核心となった陰謀論を生む

→　陰謀論のベストセラー作家、ネスタ・ヘレン・ウエブスター（１８７６～１９６０）

→　フランス革命の〈裡側からの〉報告（輪廻転生云々）

→　すべてはフリーメイソンとイルミナーティの陰謀云々

→　チャーチルの礼賛（引用２）

→　ヒトラーもチャーチルも〈国際陰謀論〉に首までどっぷりと浸っていた

→　パラノイアの実体性

→　レーニン集団も、毛集団も、秘密結社から出発し、強権独裁を実現した

→　その際かれらは、自己集団をターゲットとする陰謀論を陰に陽に活用した
（ネチャーエフ事件１８６９年が画期となる　→　本論考の第二部で検証）

→　〈あおり〉に対抗するプロパガンダの〈あおり〉

→　〈恐怖〉のモメントの実効性（ツキジデス的、ホッブズ的状況）

→　出発点となったイルミナーティの〈首謀者〉クニッゲ男爵は、典型的な啓蒙期の〈世界市民〉だった

→　礼儀作法の本（『人々とのつきあいかたについて』１７８８年）はいまだにスタンダードなマニュアルとして復刊されている

引用２

〈このユダヤ人の運動（シオニズム）は新しいものではない。ヴァイスハウプトのスパルタクス団（※イルミナーティのこと）、カール・マルクスからトロツキイにいたるまで（ロシア）、ベラ・クーン（ハンガリー）、ローザ・ルクセンブルク（ドイツ）、エマ・ゴールドマン（合衆国）、これは世界中に広がる、文明転覆をはかる陰謀である。そしてそのことによって、退行した社会組織を再建し、嫉妬に満ちた悪意、実現不可能な平等、そうしたものを広めようとする。そしてその陰謀は、日々、いやましに広がっていく。この現代の作家、ウエブスター女史が熟達の筆さばきで示したごとく、おなじ陰謀がまた、フランス革命の悲劇においても、重要な要素となっていたのである。〉（ウィンストン・チャーチル〈シオニズム、ヴァーサス、ボルシェヴィズム：ユダヤ人の魂をめぐる闘争〉１９２０年、新聞寄稿論文）

１５．国家主義の台頭とヘーゲルの歴史哲学

→　〈革命〉の弁証法

→　反革命の力学　→　近代国家の警察国家への傾斜

→　プロイセンの反動政策

→　学生運動（ブルシェンシャフト運動）に対抗するため、ヘーゲルをベルリン大に招聘（１８１８年）

→　『法哲学』出版（１８２１年）、内容は法哲学ではなく、法理を捨象する国家の正当化（＝法哲学の否定）

→　国家と理性の等置（引用３）

→　理性主体と自由の等置はカント哲学により完成されていた

→　ヘーゲルはしかしこの自由を個人の自由ではなく、国家の自由へと拡大した（理性主体が個人ではなく、国家に拡大されたことに照応している）

→　主体化された国家が実定法の根拠となる（引用４）

→　国家を抑止する原理の不在

→　国民主権の否定（引用５）
（国民　＝　「烏合の衆」！）

→　国家主権の単一性　→　三権分立の全否定（引用６）

→　ヘーゲルのフランス革命観の錯綜

→　恐怖政治は強権の統合ではなく、分裂によって引き起こされたとする（引用７）

→　これは歴史的事実に真っ向から対立する妄想

→　一党独裁的な強権の統合を含意している（ボルシェヴィズム、ナチズムへの展開の不吉な予告）

引用３

〈国家は理性的な意志であり、理性的な意志は、その本質からして、自由で、自己同一的存在である。理性的意志そのものである国家は、自由そのものであり、自由の実現である。……

国家は、この世界に現存し、実現される、意識にもたらされた精神である。〉（ヘーゲル『法哲学』、〈国家〉、５００ｐ）

引用４

〈国家は、第二の自然であり、意志にもとづいて現実を理性的に動かそうとするものであって、この精神的現実のうちに本来ふくまれている理性的な内実が、法律の形で現象しなければならない。〉（ヘーゲル『法哲学』〈緒言〉）

引用５

〈国民主権という言葉があるが、近年それについて論じられていることは、原則として、意味が曖昧である。……

国民そのものは、烏合の衆にすぎない（！）。だから国家という組織が必要不可欠にあり、政府も存在するのだ。〉（同上、５５８ｐ）

引用６

〈こうした区別（三権の分立）を最初に言い出したのはモンテスキューだが、そのような権力を別に（国家主権とはべつに）二つ立て、一方が他方を制約するというのは、根本的な間違いである。……それでは国家の統一が破棄されてしまう。……国家は一つでなければならない。〉（同上、５６３ｐ）。

引用７

〈フランス革命の経過を見れば、国家統一の必要性は一目瞭然である。最初は国民議会が王と内閣から独立して実権を握っていたのに、そののち、総裁政府と立法議会が独立の権力基盤となった。このように二つの権力が並び立つと、どちらか一方が優位に立って、暴力的に他方を押さえようとする。〉（同上、５６３ｐ）

１６．〈世界史〉は〈神義論〉である

→　世界史の事実が、〈精神〉の自己正当化の原理とされる
→　キリスト教救済史（アウグスティヌス〈神の国〉のモデル）の活用
→　プロイセンの優越は正当化される
→　ヨーロッパ列強の他民族に対する優越は正当化される
→　１．人種格差の是認
→　２．奴隷制の是認
→　３．植民地主義の是認
→　酷薄で低劣な十九世紀史は、その出発点でヘーゲルという正当化のイデオローグを持った
→　「哲学とは自分の時代を思惟によってとらえたものである」（『法哲学要綱』）というドグマの実践型
→　この意味では彼のプロイセン国家礼賛は「時代の産物」でもある
→　真の哲学者であった苦学時代からの莫大な懸隔
→　哲学的営為そのものの通俗化、イデオロギー化、本質的頽落

１７．ヘーゲルの強権国家論の背景

→　フランス的絶対主義（〈朕は国家である〉）の残響
→　ドイツ的分裂の「悲惨」（青年期までのヘーゲルの政治体験）
→　しかし青年期の彼は国家死滅論に傾いたことすらあった（引用８）

→　啓蒙期への接近は「自己疎外」であったと自己修正される（『精神現象学』〈自己疎外的精神、教養〉）
→　**Bildung**（〈自己形成〉、〈教養〉）のアンビバレンツ
→　動態における主体性、静態（完成体）における規範性、他動性
→　ヘーゲルにとっては啓蒙期の哲学的達成は、すべて〈教養〉の重圧と化した
→　啓蒙の本国、フランス的教養の圧力
→　疎外された自己意識の回帰のモデルへ
　　＝　〈精神〉と同定された自己（引用９）
→　ドイツ的〈貧困〉への復帰（引用１０）
→　道徳的精神の発見（引用１１）

引用８

〈国家は純粋に機械論的なものである。しかしそもそも、機械というものには、精神的観念は付随しない。自由の対象となるものだけが、理念という名にあたいするからだ。ゆえにわれわれは、国家を超越しなければならない。国家は自由な人間をすべて機械の歯車として扱う。これこそまさにあってはならないことだ。ゆえに国家は死滅しなければならない。）（ヘーゲル『ドイツ観念論の最古の体系プログラム』１７９６～９７断片）

引用９

〈自己意識は、そのまま自己自身を一般的な形で確信しており、この関係のうちに、自らの純粋意識を保っている。ゆえに、この関係においても、やはり真理と現在、そして現実とが統一されている。二つの世界は和解しており、天上は地上に移される。〉（同上、〈啓蒙の真理〉、３３６ｐ）

引用１０

〈絶対的自由は（※自己観照によって自由となった若きヘーゲルは）、自己自身を破壊する現実から出て（※啓蒙的教養の束縛を捨て）、それとは別の自己意識的精神の国に移る。〉（同上、３４３ｐ）

引用１１

〈この国で、絶対的自由は、この非現実そのものの中で真であると是認される。そしてこの真理を思惟することによって、そしてその思惟にとどまる限りにおいて、精神は活力を回復し、自己意識のなかに閉じこめられた存在こそ、完全で十分な本質であると知るのである。つまりここに、道徳的精神という、新しい形態が生じる。〉（同上、３４３）

１８．ヘーゲル哲学の核心部

→　〈世界〉との〈宥和〉のモデル
→　有機的全体の弁証法（引用１２）
→　時間における精神の全体性（引用１３）
→　その系としての〈世界史〉の全体性

引用１２

〈つぼみは、花が咲くと消えてしまう。そこで、つぼみは花によって否定されると言ってもよい。同じように、果実によって、花は植物における偽であると宣告され、植物の真としての果実が花にとってかわる。これらの形式は、互いに異なっているばかりでなく、互いに相容れないものとして斥け合う。しかし、これらの形式は、流動的な性質を持っているため、同時に有機的統一の契機となる。この統一にあっては、形式はたがいに敵対しないばかりか、一方は他方と同じように必然的である。この等しい必然があってはじめて、全体しての生命が成り立つのである。〉（『精神現象学』〈序論〉１６ｐ）

引用１３

〈精神の全体だけが、時間の中にある。そして精神の全体そのものの形態であるような形は、継起する時間の流れのうちに現れる。というのは、全体のみが本来の現実性を持つからである。それは他在に対し、純粋自由の形式をもっており、時間そのものとして現れる。〉（『精神現象学』〈宗教〉、３８５ｐ）

１９.『精神現象学』の二重の課題（イッポリット）
→　個物の実存的積極性に対する独特の感覚
→　純粋意識の自己形成が、個人意識（としてのヘーゲル）の自己形成過程と重合する
→　この重合によって、個と全体の弁証法は〈記述（観照、回想）〉として完成される
→　個別的な自我が時代の全精神を包括する〈絶対知〉へと自己形成する
　＝　個人意識の中で回想される世界史の全体性（画廊の比喩）
→　個物は普遍へとすくいとられ、〈宥和〉する
→　個物の〈悲劇〉は、普遍と〈和解〉する
→　〈悲劇〉（ギリシア悲劇）は〈受難〉（キリストの救済史的受難）と融合する
→　ヘルダーリンの〈パンと葡萄酒〉が予告した宥和

２０．宥和哲学の通俗化　→　〈悲劇〉との〈和解〉　＝　現状の機械的肯定
→　ブッシュ・ジュニアの例　→　イラク戦争のすべてが「悲劇」となる

２１．十九世紀的酷薄は、すべて〈世界史の悲劇〉として肯定された

→　奴隷制の肯定（引用１４）
→　植民地主義の肯定（引用１５）
→　ヘーゲル的〈世界史〉は、弱肉強食期のヨーロッパ列強にとって〈世界史的国体論〉を提供した
→　ここでも家産国家型の〈分捕り放題〉の〈実効支配〉論理が復活する
→　国家外、世界外におかれた超越原理は〈人種〉である
→　この人種的国体論が、〈文明化〉イデオロギーの内実となった
→　その〈文明化〉の圧力が、幕末維新の〈外的力学〉となった
→　ペリーも、オールコックも、パークスも、ハリスも、すべてこの力学によって、〈軍艦外交〉のその都度の代理人となった
→　幕末維新は、ヨーロッパ的文脈からは、つねに〈悲劇〉含みであったことを忘れないようにしたい

引用１４

〈これまで黒人をヨーロッパ人に結びつけていたもので、今日もなお続いている唯一の本質的な関係は、奴隷の関係である。実際、黒人はこの奴隷制をべつに許し難いものだとは思っていない。それどころか、奴隷売買と奴隷制の廃止のために尽くしてきたイギリス人こそ、黒人自身に敵視されているのである。なぜなら、黒人の王にとっては、彼が捕虜にした敵はもちろん、自分の臣下さえ奴隷に売ることが一つの重要な仕事であるからである。しかしまたその限りで、一般的に言えば、奴隷制度はかえって黒人の間に人間的な感情を目ざめさせることにもなったのである。〉（ヘーゲル『歴史哲学』〈序論〉、上２０９ｐ）

引用１５

〈古代においてはアレクサンドロス大王が、はじめてこの地に（※東洋、オリエントに）侵入することに成功した。もっとも、彼はただこの地に少しだけ足を踏み入れたにすぎない。ところが近世のヨーロッパ人は、背後から迂回して、つまり前述したように、あの一般的に言って国々を結ぶ媒体であるところの海を通ることによって、はじめてこの夢の国（※インド）と直接に関係を結ぶことができたのであった。イギリス人、というよりもむしろ東インド会社が、いまではこの地の支配者となっている。実際、ヨーロッパ人の支配下に入るということは、アジアの国々の必然的な運命であって、その点では中国も、いつかは同じ運命を辿るに違いないのである。〉（同上、第一部〈東洋の世界〉、上、２７７ｐ）

２２．近代哲学史の最大の〈悲劇〉
→　どうして近代を代表する観念論哲学大系が、その〈現実〉への適用において、こうしたドラスティックな人種論へと退行したのか
→　合理主義に内在する自己肥大の問題
→　デカルトにおいてすでにコギトは〈世界を欺く神〉と対峙した

→　その〈欺く神〉が不在のまま、世界原理と自己を同一化したところに、ヘーゲルの精神哲学は自己展開を始める
→　啓蒙精神もまた退行を始めていた
→　ディドロ的百科全書は、ブルジョワ文化の中では、おしゃべりな物知りに退行する（『ボヴァリー夫人』に登場する薬剤師のオム）
→　老ヘーゲルもまた、観念論の崇高さを忘れ、大物となり、通俗なおしゃべりの世界へと頽落した
→　あらゆる個物、定有に対する現状の絶対的肯定
　　＝　世界史的〈免罪符〉
→　世界史はすべての現状肯定、事実肯定に終わるなら、もはや世界史ではない
→　ルネサンス的実存が始めた〈対立物の調和〉の、アンチクライマックスな末路

２３．カント的自律と〈人倫の主体としての国家〉の対極性
→　カント的自律を国家制度に拡張することが、十九世紀のコモンセンスとリベラリズムの中心課題となった
→　法治国家論、立憲主義へ（グナイスト、イェリネク、美濃部達吉）
→　他方、強権論は右派と左派に分岐して、融合と対立を続けた
→　右派強権論の生物主義化　→　進化論との融合　→　無制約の人種論へ
→　ヨーロッパ的国体論　＝　〈文明化〉イデオロギーの形成
→　家産国家型〈分捕り〉合戦への退行が特徴的
→　人倫の疎外　→　左派地下活動の秘密結社へ　→　革命強権主義の展開
→　この左派強権主義においても〈革命的指導者〉は、党と国家の外に位置した
→　家産国家型操作の可能性（ラーゲリと五カ年計画の結合等）
→　ロベスピエールの〈至高者〉は、ヘーゲルの〈世界精神〉の先駆型である
→　幕末維新の日本は、開港開国の圧力を通じて、列強を動かす〈文明化〉イデオロギーと対峙し続けることになった
→　その最後のピースとしての進化論の検証

（近代本論第十二回キーワード）